

## 平成30年度 附属世田谷小学校 学校経営計画

### 1. 附属学校の役割

- 学部・大学院における研究を附属学校で実際の指導に取り入れ、その結果を学部・大学院の教育研究に反映していく実験・実証校としての役割
- 学部・大学院の教育研究に基づいて、教育実習生を指導する教育実習校としての役割
- 一般公立学校と同様に普通教育を行う公教育の役割
- 地域の学校と連携して教育。研究を推し進める役割

### 2. 東京学芸大学附属学校教育目標

東京学芸大学附属学校は、在学する幼児・児童・生徒に普通教育を施すとともに、大学と連携して実証的研究や実践的研究に取り組むことにより、

- 協働して課題を解決する力
- 多様性を尊重する力
- 自己を振り返り、自己を表現する力
- 新しい社会を創造する力

の四つの力を持った次世代の子どもを育成する教育を推進する。

### 3. 附属世田谷小学校 教育目標

「子どもが、人やもの、こととの豊かなかわりを通して、自律性と共存性を高め、相互啓発的な生き方を追求していけるようにする」

### 4. 育てたい児童像

「思いゆたかに 考えふかく とともに生きる子」

- ・充実した思考力…広い視野に立ち、合理的、創造的に考える子。
- ・錬磨した感受性…人間や自然を親愛し、情操の豊かな子。
- ・自覚した社会連帯性…自他を尊重し、協力して社会を高めていく子。
- ・徹底した実践力…心身ともに健全で最後までがんばりぬく子。

### 5. 中期経営目標

- 先端的教育の実証的研究を行う  
…今後の三年間で、これまで培ってきた「相互啓発的な学び」をベースとした次世代の学校教育の形を提案する。
- 地域の拠点校として現職研修、情報発信を行う  
…今後の三年間で、上の研究成果を生かしながら、地域等への研修支援・発信機能を構築する。

## 6. 年度経営目標

### (1) 学校運営の目標：

◎子どもが安心して集える学校を目指して組織的に活動する。特に日常的観察とその共有を重視する。

評価法：安心係数 $\sigma$ （補遺1）（個人別評価値はなし）

○教員はQoLに留意する。

精神の豊かさがなければ次代の理想の教育を実体化することはできない。教員は、仕事の効率を高め、本質的な課題に注力し、教育を追求することを通じて精神を豊かにしよう。

評価法：QoLを向上できたと判断する場合：+1、例年と比較して変化が無い場合：+0、質の低下を招いたと判断する場合：-1

### (2) 教育活動の目標

◎相互啓発的な学び方の育成。

児童が教えあい語りあうことを通じて、見て聞いて感じて学び、語り表現して学ぶことを学びと成長との中核とすることは、本校の教育の土台である。

評価法：相互啓発的学びの質を何らかの側面で向上できた場合：+1、例年と比較して特段の変化を認めない場合：+0、質の低下を招いてしまったと判断する場合：-1

◎次世代の学びへのアプローチ。

東京学芸大学の附属学校において、世田谷地区は先導的教育の実践を任務としている。相互啓発的学びのもとで、次世代が特に学ぶべき内容を検討する。

評価法：自身にとって何らかの創造的な示唆・発想を得た、もしくは実践できたと考える場合+1、特段の発想を得るには至らなかったと判断する場合+0。

### (3) 研究活動の目標

○研究上の提案や成果を積極的に公開する。

評価法：研究論文や著書などの件数（目標値 2/年）

研究授業の公開件数（目標値 1/年）

○学会・研修への参加を積極的に行い、研鑽に努める。

評価法：学会・研究会の発表件数（目標値 2/年）

大学との連携活動件数（目標値 2/年）

### (4) 学生の教育・支援活動の目標

○学部教育実習、教職員大学生実習、学外者教育実習などを積極的に行う。

評価法：担当数（目標値 2/年）

○教育実習において、実習生の精神的支援に心がける。

評価法：個人別評価なし。補遺2の学生支援係数 $\sigma'$ を用いて全体評価。

### (5) 社会貢献活動の目標

○現職者研修、研究セミナーなどを積極的に行い、知識・技能の共有に努め

る。

評価法：現職者研修開催回数（目標値 1/年）

社会貢献活動回数（目標値 2/年）

#### 補遺 1 安心係数 $\sigma$

報告された 1 事案ごとに、サポートによる解決・緩和効果を想定した評価値。サポート報告が蓄積されるほど、事案の危険度が 1 から 0 へと低減できると仮定する。

サポート報告とは、スクールサポータによる報告、スクールカウンセラによる報告、担任その他教師による支援報告などを意味する。

$i$  番目の事案についての、特性サポート報告回数（下式の  $\sigma_i$  が 0.5 程度になるサポート報告回数。当面は事案ごとの報告総数の平均値を小数点以下切り捨てた値とする）を  $\tau_i$  とおく。さらに、報告数の大きさの尺度を  $T$  とする。ここでは事案ごと報告数のうち最も大きいケースの報告桁数とし、 $T=10$  と仮定する。 $i$  事案についての、サポート報告回数をと  $x_i$  おく。

$i$  事案についての安心係数  $\sigma_i$  は、

$$\sigma_i = [1 + \exp\{(x_i - \tau_i)/T\}]^{-1} \quad (0 < \sigma_i < 1)$$

ただし、 $\tau_i$  は各報告種別ごとの事案ごと報告平均数を整数に丸めたものとする。 $\sigma_i$  は、事案への対応が重なるにつれ、危険度が 1 から 0 に漸近するものとしたモデルである。

全事案数  $N$  についての  $\sigma_i$  の合計を安心係数  $\sigma$  とする。

$$\begin{aligned} \sigma &= (\sum \sigma_i) / N \\ &= \sum [1 + \exp\{(x_i - \tau_i)/10\}]^{-1} / N \end{aligned}$$

この計算モデルは暫定的な案である。

#### 補遺 2 学生支援係数 $\sigma'$

安心係数と同様にサポート報告による評価。

$i$  番目の学生支援事案についての安心係数  $\sigma'_i$  は、

$$\sigma'_i = [1 + \exp\{(x'_i - \tau'_i) / T\}]^{-1}$$

ただし、 $\tau'_i$  は支援報告平均数を整数に丸めた値。

全支援事案数  $N'$  についての  $\sigma'_i$  の合計を支援係数  $\sigma'$  とする。

$$\sigma' = \sum [1 + \exp\{(x'_i - \tau'_i) / T\}]^{-1} / N'$$